

私たちにできること

9年分の過去とこれから

浅田羽菜両親

I. 事故のこと：溺水状況

2012年7月30日月曜日

夏休みの水泳指導中の事故

参加児童は1年から3年の69名、 教諭は3名

最深部は110cm 、 菜の身長は113.5cm

増水の情報が共有されないまま

大型フロートを含むビート板16枚を使った
自由遊泳中、浮いているところを発見されます。

I. 事故のこと：救護措置

救護措置は適切だったのか

心臓マッサージも人口呼吸も継続されず
教諭らが混乱、連携できていなかった
救急車を呼ぶよりAEDを探すことが優先
管理側の指揮も混乱

発見されてすぐに引き上げられており
救命は十分に可能な状態だったのにも
かかわらず

I. 事故のこと：病院で

病院で対面した羽菜は
自分で息をしていませんでした。
医師に言わされたのは「奇跡を待つしかない」
との言葉。
ずっと手を握って頭を撫で、必死で呼び続け
ましたが戻ってきませんでした。

7月31日17時18分。
私たちの娘は一人で行ってしまいました。

Ⅱ. 事故後の経緯

●2012年

7月30日 事故発生（31日羽菜死亡）

8月17日 小学校より説明

溺水原因は不明「空白の7分」

→ 調査は進まず

11月 6日 民事裁判提訴 新資料は提出されず

●2013年

6月 6日 第三者委員会設置要望書を市に提出

7月27日 第三者委員会発足 第一回委員会

8月19日 第三者委員会 再現検証実施

Ⅱ. 事故後の経緯

●2014年

3月11日 民事裁判 勝訴

担当教諭らの監視義務の懈怠認定

7月20日 第三者委員会調査を終結

調査報告書提出

事実認定 溺水時の状況認定&提言

7月24日 質問状提出 回答は不能との回答

8月11日 両親は自主検証へ再検討チームを結成

11月20日 第三者委員会による

調査資料破棄が判明

Ⅱ. 事故後の経緯

●2015年

6月 7日 第一次実地検証
プールの計測など

8月22日 第二次実地検
児童らの協力を得て実地検証を行う
基本運動測定・動きを再現、測定

●2016年

3月22日 再測定
カメラ位置からの映像修正作業

Ⅲ.両親がしてきたこと：警察と

●検査は行われず

加療しているため、死因が溺死とならず

→業務上過失致死の構成要件には当たらず

現場検証、教員等への聴き取りのみ

罪に問えない以上、検査は行わない

事故原因すら不明なまま？

まったく納得できない

詳しい経過を知る手段を持つのは警察だけでは？

III.両親がしてきたこと：裁判

● 2012年11月民事裁判 提訴

事実を究明するための裁判として（裁判長明言）
事故後の調査の有無、調査資料の提出を求めるが
京都市、京都府からの新たな証拠提出はなし
「積極的な主張はしないが、責任は認めない」

●2014年3月勝訴

- ・担当教諭らの監視義務の懈怠が認められる
- ・既存資料から、児童の証言を採用しての推認
「大型ビート板との接触が溺水を引き起こした」

→結局、事故原因には近づけず

Ⅲ.両親がしてきたこと：調査委員会

●究明の最後の手段として（2013年7月）

「養徳小学校プール事故 第三者調査委員会」

- ・両親と市教委の両者で委員を選任、設置要綱を作成
- ・調査委員7名（弁護士 2名、医師 2名、研究者2名、プール安全にかかわるNPO法人代表者 1名）

学校事故のための第三者委員会は初、
遺族と市教委が協働して設立することも画期的と

候補者全員と面談、「再現検証」「児童の聴き取り」を必ず行うと約束してくれた方を選任

Ⅲ.両親がしてきたこと：調査委員会

●調査報告書（2014年7月提出）

水泳指導や救護措置の課題などの提言は有益。

しかし、「溺水に至る経緯」は根拠に乏しく、
データの精度・計算方法、妥当性には疑問が残った。

●二度にわたる質問状提出

→「回答はできない、報告済み」と拒否

もし原因が不明だったとしても、調査を尽くしたことと、
認定の根拠がしっかりと説明されれば、それを受け入れ、
納得したと思います。

しかし、残念ながらそういう回答は得られませんでした。

Ⅲ.両親がしてきたこと：調査委員会

●調査資料一切の廃棄が判明

- ・廃棄の理由（市教委を通じての回答）
 - ①報告書はそれ自体で自己完結している
調査資料は報告書の妥当性・存在意義には影響しない
 - ②個人情報を含む機密性の高い情報の漏えい防止のため

IV.両親がしてきたこと：自主検証

●事故調査再検討チームを設置（2014年8月）

- ・自主検証の目的：

なによりも羽菜の行動に迫ること

第三者委員会の資料廃棄を受け、

独自にデータを収集、分析することを決断

→実地検証：計測可能な仮定のみに基いて、
数理的なシミュレーションで検討

聞き取り：事故にかかわった学校関係者、
保護者、子どもたちに聞き取り

IV.両親がしてきたこと：自主検証

●2014年8月～

- ・第三者委員会報告書に示された数字を再検討
- ・プールでの実地検証を準備

●2015年

6月 7日 第一次実地検証

プールの計測、カメラ位置などを確定

8月22日 第二次実地検証

プールに児童らを集めて実地検証を行う

基本運動測定・動きを再現、測定

8月～12月 聴き取り調査 当日在校の教諭全員に

●2016年

1月～ 数的・聞き取りデータの分析

3月13日 実地検証にかかるデータの再測定

IV.両親がしてきたこと：自主検証

8月22日 第二次実地検証

- 参加人員：検証チーム20名、補助者23名（水泳監視）
小学校児童 69名

● 測定手段等

ビデオカメラ4台（校舎屋上2、プールサイド2）
6つの測定班がトップウォッチで計測

- 羽菜役児童、1～3年平均体格児童、教諭らの基本運動（プール内の速度等）を計測
- 羽菜をめぐる主要人物の動きを再現、測定
- 自由遊泳の再現、全体的な動きを検討
- 検討されていない移動経路を推定、計測

IV.両親がしてきたこと：自主検証

●実地検証データの数的な検討を進める

- シミュレート

映像と実際のプール内位置を関係づけ、各人の動いた距離と速度、加速度を求める。
独自のソフトで羽菜他の動きを再検討。

●聴き取り調査のまとめと分析

- 実地検証の聞き取り

事故当日の状況等についても聞き取り実施。

- 当日学校にいた12名の教諭から当日の動きを聞き取
1名以外、第三者委員会の聞き取りは受けておらず、貴重なデータを収集

V.これから：私たちにできること

- 羽菜の最後の声を聞くこと
羽菜の尊厳を回復し、人生を守ってやること
- 遺族として伝えていくこと
事故によって変わってしまった家族の未来
不在の痛み、希望のなさという生々しい現実
娘の未来も、両親の時間も喪われた
→事故がいかに家族の人生を変えるか
→事故を再び起こさないためには

V.これから：私たちにできること

学校にも考え方
発信し続けてもらいたい

- プール事故の当事者だからこそ
変えていけることは何か
→ これからの具体的な目標と実践を
- プール事故の当事者だからこそ
発信できることがあるはず